



仇新当昌志
坤

中村俊定文庫
文庫 18
615
2



此冊子の予美わきり一可友とち誰と逢
み〜打連と西國新柳の折〜
採物あり是れ難近きあ〜りまき
書る形と隙を法〜あ〜〜
志〜か〜ころ新端小体〜り〜と
書皆も兄え侍〜い〜日ま
未〜ふ〜雨舎〜せ〜その新ふ
おを乞〜泊〜を定〜



其おといふ海をく渡つたはる
之出んとせしを於車軸を流し流し
滞留せしよ永き日とすしつら
あくちくろりう如くえましのい
此背戸傳ひよ詭者乃其身をあり
是れ傳りんといえぬ哉昔う
彼おとけしえん丸八旬よあま
翁乃只指しおとけし一節歌

るの海を甚よ挽ひ河をく那
宮さんと納戸とかかりきおより
寫本を阿まししと出し是れ
おとけし一見ゆ及多敷子又珠
一紀古きく写をましをたの
ちの近起以る昔れ海ふ向ふいと
むけし一紀ましつらに
又古多し一草紙をまし

一母つしまいしきりきりをもれむ
よを誤信しきりしころもり
めらまふといえを老人大いよ怪ひ又
破戸よりさぬくぞ富本をぬ出
望のしとありし由一連のひりし何や
佛の道をきりしをよ又ひりし鬼貫
指の千句り書しをよ予に此を
とひ請しきりし此を自筆と持来

きりしをよ七中書きし及ひ
至も不しきりし此を自筆と
有し様もちりしをよあしきりし

石壽秀國



和歌正風躰之傳

凡古来より此撰集其時代くの風義
ありて時代よ叶ハテ家奇を用ひる是ハ
其撰集出素々年号を以てい法の時代
の風ハ如斯と勘へ知新一一但一正風躰と
云々のハ何處乃時代よ毛有なり是の偽
ハ如斯詠わしを正風躰といふなり偽の有と
以テ其飾を以てよ其由えちり集よりて
以テ是れ奇を以てよ其由えちり集よりて
以テ是れ奇を以てよ其由えちり集よりて



風流ふ過ぎ人情も実少きと又々有り
質素ある哥も有りを阿津免くも集る
其時代人柄も鄙しき古在誠は智を文物ハ
備へるをと見取魚一哥をよそ時代改勢
の文質を分つと云く時代くの世上乃
風後まをを知らずなり然るハ当世ハ何
やうなる集の用ら海くと云ふ二十二代集の
末に新拾遺集此風後を用ひて新也
俳諧の正風雅もかりて諸集多しと

いへたわみふま魚起ハ芭蕉の猿蓑をみ
多し也和哥ハ何布とよもても新拾遺集
をうて英りて是ハ撰て見て不合ハと執
さる也當時和哥所の決定あり堂上り
まも此事ハ甚秘せり新も也和哥所
の門人よなりても武家町人百姓ハ衆く
此取方ハ不傳宮方ハ和哥所より御相傳の
写し物ホも不此者ハ御傳りて其家
不有不此学者よ伝付りて秋秋此り

○
歌謡由りよこ進を初王當時禁中和哥の
宗匠ハ靈元院法皇此御子有栖川一品
中務卿職仁親王縁聞の宗匠ハ風早實
積郷あり宗匠よあゝさハ和哥を詠削
去歌事なしく以肉くあゝ詠削何ハ畢竟
表立さり奉之靈元法皇ハ近代の和哥乃
御上手也然詠よ先正風狝をよし習らせ正風
狝をよく詠よ均き歌とも其上よそ風流を
よむるも御免るもやちよ卓庵集といハ

○
歌阿法師此集あり歌阿正風狝の遠くありて
弟菴集のことくふよ免れ正風狝よちよ
法皇も初心此人ハ卓庵集を能く詠よと
勅あり武者小路大納言実院ハ是近代の
名人也進とも詠よハ悉く法皇此御詠削
あり是等ハ遠人と呼ばれ程の人ハ正風狝を
底よ含く面を風流よよむるを許し御ひぬ
歌阿法師ハ四條大納言公任卿の末なりといハ
地下小落て行御此僧とちよ天台よ妻帯

なり和哥れ正風狝をよく詠覺へる哥は
唐去の故事あを和哥へよこ入おもも耳
當りさ派やう故子なりとを哥れ面はまむ
やうよよみこり

愛恋

秋露の無けの松もあはれ才の哉

むきふちきりれ色かか派く舞

此哥ハ諸本ハ秋露よわさ迷色かり迷はるも
松ハ常盤本よえ色うう以非情の松に

如是なり有情の人とて何とぞ心留りける
とと心れい詠のわたり行を答め派らん箇也
如新故子をも用ひきりても新ハよくゆめ
妙里動へく見る小此哥ハ唐去れ季札う故子
之秋露ハ紐の異名なり紐をきりくと物せ
人乃塚へ物を遠えハ紐をわげらる人だあるに
互に生く居あうら何とぞ孩あきりれ色亦
そと答ふるあ里紐を松へくまう故子故子
契りと詠こりわやうれ故事を故子ときまえ

ぬやうに年よむく正風此歌の川之是を下系
よむき道は故子をきりんとて予哥の角く
しく調生事く耳と川拍也正風此と云本新ハ
新阿の哥年

白妙此中法帝鳥も埋きく

明後本末の雪ふ啼なり

都少く疫病流行するおろし鷄よ本新と
いひて麻又ハ紙を付て新の四方に放つ予
其故年鷄の吳名を本新つけるとい其鷄の

本よとあり辰の夜此間小雪津よりて雪乃
中よ啼をありれと思ひてよみらる哥なる其以
勅有く風雅集と云和哥集を撰ませり撰者
荒茅合新阿ハ哥此上手の中え阿造は此夜の集
よ浅くわいふ源一とてよみ哥ともを御覽
此歌小免角風雅も新哥なり由一此度の集此
風候よあひうし一舎候の上雪よ啼ありの哥
を引出し雪や啼らそと改め是れは雪乃
下年雞のおろし哉知るさる者ハ雪や啼らんと

三
和歌集一。是を風雅の歌なり。風雅
集此題を叶とて。和歌を云く其より。を
撰者元より。和歌集一。は種傳此歌を勅撰
集より入ら。和歌集一。は誰う。重の啼と。和歌
集より。夫を。八歌此歌。化拘。ありて。甚悟。年
波流一。是を。歌此誠。を。集より。起と
思ひ。一。本意。を。集より。入ら。進さる
せん。を。和歌集一。を。引。出され。を。集より
浅く。り。時。年。二條。大納言。爲。世。を。以。障。流。り

あり。此度の撰者より。進く。辰玉ひ。一。此次。才
を。少。ふ。げ。甚。感。一。を。ひ。御。息。子。一。も。才。子。一。
七。傳。授。を。記。古。今。大。事。源。氏。物語。の。口。傳。其。外
和。歌。此。秘。傳。悉。く。和。阿。法師。一。即。お。傳。を。才。子。
ある。是。を。以。て。正。風。雅。と。云。ハ。偽。の。才。歌。集。
あり。當時。又。此。歌。を。よ。む。習。を。詮。と。ま。ら。ち。是
故。小。和。歌。此。秘。傳。古。ま。八。草。庵。集。を。入。れ。和。歌
是。よ。み。方。の。才。一。此。秘。傳。なり。

和歌六義之傳

和歌小義義をとりて一先より是と比乃
歌の詠ん是ハ興の歌よあゆむんと案一と
よむよのよはあつてもよみかへは自然と
是ハ比乃歌是ハ興の歌と辨を定家なり
始めより其辨を定てよむ事ハあつて冷泉故
大納言為久心の恒よ才子前へ亦きり一と
随分歌詠あつて一歌作りのあつて一
と云く歌よみと云ふハ心より流るる無を
よむ事ハあつて一是ハ上手のう一此事

みそ初心の間ハい詠く一云葉つらひをせんき
せきれと歌よあつて上手のあつても人乃
耳を驚くさんとさゆくと詠一き詞を詠り
あつて歌作りと云ふ歌作りも初心の内ハ
処々一

和歌姿意之傳

詠歌大概おほくハ心ハ新ら一とよむ一
とあり是和歌をよむ要なり連歌俳諧も
おほく事あり此心得を流るる出せは秀歌

秀句とむね也今ハ之船云禁きハの姿えり
あ〜〜〜志〜心大〜古き故年本意を
失ふ姿をぬ〜と云ハハハハ聖の花ハ例え七
白雲ハ似〜立回のお葉ハ瑞ハ見え〜との
取也〜哉新〜〜〜事〜後醍醐天王
吉野山ハ終〜也あハ時御節を泮〜て山を
御歩行あり〜吉水院法印宗信吾寺乃
前より法〜は里居〜〜〜ハ御制記

三の〜山ハ山也〜りん

今い〜う〜〜花ハ咲〜ん

宗信返〜

横さ〜山ハを造持と白雲乃

い海を志〜〜ハ聖の山

此あ〜〜ハ聖捨遣ハ凡え〜ハおあり〜
白雲も〜心をあ〜〜〜ハおむ〜也

而雨於波之傳

テニヲハとし事四聲ハ〜ハ熱〜ハ異國
の書ハ音後を〜〜返レを本とす造持



日本此詞よせハ一音ふも縁起としあり
仁遠沃安討之ニテハ一音ふも縁起よしなり
梵語も其趣ありまゝ一音ふも縁起二音
合せしむるハ日本ノ詞テアニ也
此字或添てもあるも梵語と同一漢字
もハテニもアニも一字も縁起也此一音
とりを解してハアニハテニヨハハハ四聲テハ
平声ニ上声ニヨハ去声ニハハ入声ナリ
此道理を合点せされも語音を分るる

四聲ちりて行歌ハよみても其音節
をばあてハ誦ハ進ハ歌ハ本ハらハハハ物
も今も禁中も和歌此御舎り時を
節を付くハうハ事ハ之連歌俳諧も
其趣風ありを句う面白くても趣向より
一くともハテニヨハ遠ハてハハハ進ハさる
ありテニヨハ漢文もハ云ハ下ハの助語辭も
焉哉乎也ハ遠ハハハ讀ハハハハハハハハハハハ
あハさるハ今ハ此ハ連歌俳諧を心くけ

人四声の分を破流ともテニヲハ此分を合点
有ハ可あらとも一向もの鎔よ合せて古哥
古句あとのテニヲハを平本よまるとよま
何由テニヲハをきつと云本を夤倭せぬよ
句を化る由一唯云あつとつと詞よハぢれとも
哥此跡風よハぢれつと俳諧よも連哥
よもぢれつと雑言といふ拘よぢれつと此のれつ
叶ハさ塚くせに人乃非を見出し一おれつと
な歌事ともを古阿つと里ハ甚恥しき

子也玉水の人多くぢれつとニヲハ三音ふ
大中小を分ぢれつと二音玉とちりさき詞
ヲを夫より大なる詞ハを又其上お大なる
詞ぢれつとハ臨淵臨氷臨谷と下へのと
むつよ二音よ返る下へのとむハ近きぢれつと
近きハちいさぢれつと望天望山望雲何也
ヲを返る上を返るよ限りなく大に一郭云
啼泣のつとを詠むまはと云も天をのつとむ
心なり二公あいなその好む詠よつとあま

ハナハク古心ヨククツル由小く授ハト云ハ
金舛濁言モシキコト也此音あり天行リ
ありさげえれをうまわあといひ又和国の原
漕出スル進ん久望れなと取志まのちき
取よき小詞なり是小大中小を分て志お時ハ
阿やまもあ一是秘傳なり

君や恋一く 恋と恋一き 恋を恋一
く 恋を恋一く 恋と恋一き 恋を恋一
く 恋を恋一く 恋と恋一き 恋を恋一
く 恋を恋一く 恋と恋一き 恋を恋一

君やハ是ハとくと恋一きと云子ああは
何とてわやうよ君や恋一と自身疑お
心あり君とハ大概の恋一きこゝ恋とを
我恋するおまハ何と祿とも恋人の
志れこゝ親子付く媒をせ一人も恋一き
と云心よそ本ハ何らん恋をと云時ハ恋
一ととをいん下を恋々家とう思ハとら
きよあり如形詞の物本といおあま
一音ち久ハ句意恋く遠よなり 其

有ふテニヨハを以て大事と云ふなり

羅年箇之傳

らんと免ハ上ヨ何と疑のわへ字あき
らんと箇りわへ一花れあらん
花もちあらん
此外何なりとも疑の字を去て下えらん
と箇るを形り然る久望の光里
此れ日よ志川心あく
無水も松も
秋
乃

わへ
とあ
あ
ら

計箇計被之傳

と
あ
ら

きふともはるふこどハ改まる所也事類と
尚くはるふ事類ハ疑ふ心ある由け違を
法免ふ詞を殊してきふ然れ共一辨の句
疑ひ阿達はこととあくても事類と箇て
句作り苦しかりし事何れとも例あり
勘へ志類魚一

津々之傳

法々と云テニヨハる而と云字を神代の是ハ
法々と讀せしはるる一免ま而と云心也

其也え法々れ打越ふての字をきつてあり、
あゝまゝてきよかへ綴り多し子曰學子而
時習之多しふ中子授之其方を法々く
文字ありよめて上と下を法々く教心よそ
法々と云ふ後撰集よ一是やこのあくもわえ
法々も別達つ知もあゝぬもお坂は関と指を
定家卿百人一首よ其もわえ法々もよの進
てハとつをてふわえて入るれをよしく
あゝ一又あゝとらよ詞よわよよ法々

お形よあしはちとちり換へあまとも
夫ハ其一首一句れ上少く見分事事よそ
全殊ハ而ノと云字のあ語を離れくすは
強ハ

秋の田れわりの海の庵地を毎地何りみ川

秋夜よハはさゆ年ぬれは

と云へきを下へお後へて一取よはとわき
切けきつ揃り祿よのあくふまハとらへきを
あきけはくをりぬるおれあくふまハは

中へもさうそきあつの本狹而なるおあり
之海をあへそを落ふぬれと云あろ也
あけきをひりり掃えといふ心をあて
哥れ云系やさうまおさる也はと加て
詠り俳諧の句よ似りて足ハハ

峰子花さく川ちり連津

此はハ能箇歌あり峯も花咲く川よ
水も流と云詞なるおなり

梅ちらく川ちりは

といえはさへはるはるしく此下ももつと
入る連さる由しま川の女方をしあぐ云ふ
なりしや川のまげまの云わししひる川を
流くとおく事ハ甚む川うし一海りまのよ
う

田子此浦ふうちいしと足んハふ妙の

わ乃言根も雲ハあり流

是等を云ふもありしくとしくと云ふを
いれまももあめ詞よ流るひきと流る

なり電ハ流はしく心まをききりり
の例みあし流なりしくと云ふハ武者の
小路實際の門前をつまむ流乃うし
ある平流へ系しんとあししを
あし川もわししりり橋をいりり
倒せんと志の門前を流る保しきんハ實際
世をりり道もかくことあやうしと
足流るを流る竹れりり橋
あやうしと足あうしと云調なりり流れとも

本邦ハあや〜と思ひても程好と云心なり
是をち〜法と云而と云つと云法あり
前より留まれば言根の雲あり法と加きり
ちきこもく程ありと云義あり然とも其よりハ
あり〜といく川も重ぬ厚き詞あり

和哥土金之傳

和哥ふ去金此秘傳といふ衣の云法と加那
とのテニハをいぢり法とハ本去と云詞あり
およひつつき〜後あり法き乃返〜

ちと出る〜然ハいつき此返〜ち〜祢代の
巻もも法きて地とち教と有り法き
去れ本邦去徳木火去金水の五乃内去ハ申央
ありて五味をう〜ありあり而〜と云字亦
云ぬ〜いく川も物を法ち〜詞あり故もつ
と讀つ〜法ち〜心なり〜又おちと云テニ
ハ去金よあり秋の金氣ハ教をさる由〜平
和のつ〜あり〜と云〜い〜やう
ある云葉をうぬといふ面白き時宛ありき

○

七

時を嫌ふも時を去るは思ふ出た時を以て
なり去る甘く和らぐは金六つよ切らぬ故
けはくくと切れるとのやうに和らぐ和らぐ
去る金代傳といふ我國古来お承け秘傳あり
此意を勤めてきて法之に切のて二八返一
つらゆら子なり和らぐ極秘事之可秘と

經冊之傳

經冊ハ元來禁中此御書扱ふなり燈ノ陰
少くおの上敷御書と詔ふ大い書を法と

風流よ見せんともめつゝき文字を法と
よめたりもやうふやうにを用ひ違ふは或ハ
異うまゝとわたくし書り故実を志とさる
也なり經冊ハおとまは法を志と書る書物の
ありあるまゝつまありとの心持を以て少く
よめり書の中古の書是を継ぐまうん上は方
少く水川を以て岡をく也然れは書けを知り
る公家流ハ故実れれく少くありよめり
書之經冊ハ三川よ折る出たよの和らぐ

三

十六

發句とも以上此打目より云なり出家沙門
誰と名を認め兼門ハ僧誰と云之官名位を
かく事あり體き歌ありは申も云云き歌を
少一者よせと云あり古歌ハ歌をかくは
體尺を席へ出た時ハ柳箱又ハ祝歌其甚子
入く出たり同體紙詠事とも書く詠不
大い書なり細字子云ハ法外之

俳諧之傳

貞徳此一才子貞室此句小

扱ハあの月々帯と云わくき
連系あれハ如部ハせは詞ハ俳諧ハ月々
と云よりかありと云と云と云ハ俳諧あり
月々帯と云と云ハ此の字千金之是云
哥俳諧の差別を知らず一連系を哥ハ
嬌ありハ月々帯ハ俳諧ハ其上の志あり
当一なり俳諧を云ふ事ありと思ふハ連系
の難云なりハ月々帯ハ道すくハあの
心持あり之靈元法皇の修りハ定家此

①

定家

哥ハくも多し道遥院の歌ハ一首も余層
あしこれにけふ定家此方まらけり悉く層
の歌もよ讀ハ名人のせきも多し一巻ハ百首の
内十首初とハ骨を折る餘りハ大て以よ詠え
其十首骨折拙おふ足重乳之俳諧もその
通りまゝ十句しハ肉まゝ三句初とハあゝろを
とあゝ餘りハ何もまゝしりて重多し之田舎
雑言と云ハ着れりまゝ十句あゝゝ詠句よ
せんともるもあゝお却て十句あゝゝ並れ句并

ありて秀句出さる物なり其故名人の俳
諧ハ却てあゝき句もあゝ十句ハ肉二三句ハ
秀句有なり此心持まゝあけまゝ上もあゝ
なりくまゝまゝの之貞徳ハ儒学哥学詩文よ
まゝもあゝゝ志て俳諧をゝゝハ文三目也
句也り秀吟ハ貞徳の骨子もゝ是も同ゝゝ
哥学者なり芭蕉ハ秀吟ハ骨子ありて後堂
和泉守殿家於後堂新七も法和見ハ小坊主
あゝりもて松尾殿ハ其後俳諧を好て只心の

①

三十一

和もむくよ但せて俳諧を彼所志するあり
綴令ていんん貞徳季吟ちとハ俳諧の能化也
云一芭蕉ハ俳道此心志道心を以て俳諧を
志する也少くもあらんる亦強ひて於不
無を以て尚世より是を伝をせよ芭蕉と相ひ
らん句候子ありて新柳の折るる俳賀一東也
菴堂彰七越路一ふ彰七坐爰少く對面一
る上阿の庭此様を甚方子ともの時掃除を
志する是も一旬取望とありら進ん芭蕉

どうあえん

い語く此おと思ひ出を様う如

此や何のくくも工夫もなく句哉とるあり
芭蕉此流あり様もよき成の句ふ付何の
傳を説く句是ハ何れ秘子をこめん句
あハあ芭蕉ハ心を以て志する句あ進ハ
子細あめる句ハあき此心を志する句
芭蕉此心ふ叶ハ句も出有まきさあり
其才子甚角ハ学問もあり

○

○
然れども芭蕉此中子なる中よりむつゝま
句ハせざる之句室代句よ

是ハくことえり花代より世山

此句を和哥れ云葉よ六割部一わく一金辨
俳諧よ志するもの之句論をいひり句と
いふ物ハわやくにまををにまををわあつて
靈元院法皇此よりゆくま句を序とくちされ
哥ふ部あり

中くよよむ云此葉とあつてり

少の志く空富士よりふせ

發句之傳

發句といふ面白くせん為もあつて又哥仙百韻
のためもあつて梅は九梅を對して吾心乃
新しげをうこり新くやう年テニヲハをつげ
吟し出はあり情の趣く候よまをのまのま
とも發句も手系ちうひてハ句よあつて
百韻哥仙杯代催一の時ハ發句と云つて但
一句をうりまの時ハ句とまうり云く發句とハ

いふに服才三よ對して始の句といふ心もそ
發句とハちあり發端此句といふ心も思ひ終
なり但之の對して一句を他時ハ上をかく
下はさりのの構成やうなるより百員五十
員ちと催子付く發句をせよと云一対ハ上下
あまにあ極よ發句此強くぬやうの能あるの
あり才三ふくちとありを構よまる由あり
發句あり構過は才三ととの外むつうく
ある由なり

昭句之傳

招ハ發句一あいーらひく隨ふ程くを極一
服ハ發句のあーらひちれハ發句ハ大吏招ハ口キ
師といふ心れやう大吏一あーらひを才一まする
よりなり客の發句をまし亭主招を付を俗説ハ
客發句亭主服と云候ハあーらひ招をましか
人れ心うハ發句を客のあーらひ一らあ
ましとあり

第三之傳

發句と服とあく一首の哥此上り句下此句成就
一たる上ふ甚二句を本辨りて是よりテ二ハ
を以て手系家の法之さるやふ句をつらぬ白
紙もめぢれハ才三を隠ふ志りと留るを慥小
まきしてと留るよりテ二ハ四声はしめぢれ
才三は留りもえ留めハ極りしらすぢり何
とて角とてと發句服の志まりを爰
あて志まり極り留るテ二ハをまめぢり
才三上をあらく下を重く留る才三の留り

慥ぢりされハ發句服の志まり加ぢり哥といふ
物ハ事よりて上此句を同け下の句もそ
え家辨もよむ

且つらふ同人あつハ浪下此浦み
とほれつ説とあつえよ
加やうよ下此句もそ志まりを符のり多

郭云ち記法を加を詠進は
きありけぢれを辨する

如新上此句もそ志まり唯けり明乃月を

①
殊れいと下れ句まで志まりのを付しり終りよ
百句五十句あとの時ハ發句一句より大凡
場の時やうよ志しるよ招を付するや招を
あびしらひよ付する招れ志まりのを付し
みんとりちめりなりまゆて留るよを
変定しを留るてハ之終りよ發句語りて上を
遅く下を重く句を付しる時ハ才三テ
留りてハ發句と才三と心のおこしと云
物もありて同しやうに句下重くある

あしよ二留う二留よし才三れ留りを志まり
さるやうよさる物之詞のさし合打としを味
して心のお越と云るを志しるや報云もある
より多し又發句上も下も志まりなく一向に系
流しし終りる時ハ才三を韻字留りよさるよ
有又韻を韻字留りてより招を韻字乃
時ハ才三留り随分わろくさししを志し
物のお借とらし維舟う句よ

不のしと候終息やかきれぬと

②

三十一

此發句いまやうまゝ合はといへば貞徳の心六
入て是より維舟の宗匠をゆたさき進み
句なり細を貞室の付くはなり

旁を流れ秋を春の型

才三ハ貞徳少くも一ハ發句眼の出来
しハ才三よ及んか秋二句テ二ハ付まあり
こゝとて貞徳才三をせしき進み維舟貞室
是よりをを上りおま云あまゝ句解ハ尚
時ハ不叶例ま引くは進とも發句れ上

をまゝ下を輝くしを眼よりあゝらゝる
弥よく合点まゝ一後水尾院の詩句よ

干風や塔の干瀉れ推小舟

後水尾院ハ和奇此詩遠人あり奇と句と乃
テ六れきひやうを尺数一は是も初ハ風やと
上をわろく推小舟と下よ力を入る

花坐月坐之傳

俳諧ハ花ハ座月の座ハ花ハ地ハ屬一を候物あり
月ハ天ハ屬一を光ハのハ流瀉ハ花をねん一

月を此より次くは何故ありと食後せよ此の花の句
本意不叶花とあれとも心は日れり之日月れり
を俳諧ありて日れ望月の望といふ心なり故年
花と云句の狛よ此の連とも心は天の陽をうけ
て同原理をあめてせよ此の花も成りて月陰分
ちる故之何と阿らりて月と無なり日ハ陽徳
なる也却て花よかて日れ本狛を不叶たしむり
故日を忍れとあはさるる故あり是ハ連哥の大意
ありて花れ本の家より中へ秘して不俳諧

の連哥と云くあはさるる連ふなりとて貞徳
句数を定めし時花の望より月れ望を多く
入るる八月は望月あり然るる月ありさるる
みかてきい故に故之花れ望ハ天より月れ日あり
といふ後を以て日の望はさるるあり但意あるハ
月より多く故にきよ花れ望の望れ也ハ日れ徳
を忍るる俳諧授甚秘をるるなり

七拍之傳并六拍之傳

俳諧本拍の傳といふ事あり貞徳甚秘せり

三

三

なり七柏とハ

玉柏

石をいふ岩と柏ハ岩より由難岩ひまといふたふ
を云万葉集より見たり赤人

和田津海子志摩にて見へぬむうハ

い川あゝくまきく君を思ひん

わすれハ海流子をいふなり石ハ海の底をいふ
なりかハと云ハ思ふ患の心をよむもやむを
不むと云ふ事

三角柏

志摩國志摩の邊古貞徳よある本よそけ系
をいふ倭勢此神供の糸をいふ事

三総柏

是も同一本よ日本記よ紀州の海邊ありと
いふ甚友之川の柏と法寺柏とまゝハ神祇平
ちるこ

苔柏

苔此玉柏と云略語之石塔を云とハ新教よ

たのこ

たのこは此若のたのこを尋ひて

今八重へきたも絶り

照柏

天子の孫をたのこのかいと云むうはたのこは此若の
たのこをたのこなりし由傳物徳の孫の
阿婆八重の孫なりと云も食物をたのこ
なりし

長女柏

夫本集よ梓の本を云ふ

光柏

燭臺をたのこめ燈をとめて臺よきしるたの
たのこなり

右を七柏と云負徳より門人重頼

維舟と号す名相傳
玄川正見

重頼より天津和尚お傳天津より欠徳自筆乃
是物秋秋お傳秋秋翁より言しきはありし
然る十三柏といふ外ふ六川の柏は傳是欠徳
甚秘せし後不接州伊丹の百丸一守武よりお傳

守武も貞徳の才子ありて京大坂の御給所を
甚秘するよりあれとも今仔細の一書人の御傳の
家あり其外ハ秋秋より御傳之別六つ拍たの如

千世拍

今日本をいむろと云本是なり四季とも小色
をいふはそれ古来ハ山も多く是を樹くその
中ハ神祇を祭る神のいむ語と哥よよむも木
の中ハ神をまつるやなり松柏と分けけては
なり色ふふとくハ此本也今世よふ拍といふ

そのハ色もつるり美もちりては整本ハあり

見手拍

薬子きし側拍是なり方面ともふ同い語を
ゆえよふの拍は二面と哥もよむあり

御幸拍

車は予之車の内安全とてゆらぐさる心之天子
仙洞などの御車よりき拍と云あり

波間拍

船を云風波を犯されとやまらうらふ影をば

てか、いと祝するを云也

葉廣拍

是ハ今俗云取の拍ハ、今ハひろ拍と云ハ
さきは恒の拍ハ、ちりか

番拍

婚禮の盃を載る盞を云

逢ふも今ハちりかと思ふとも

はくひか、ハの中此志るけき平兼盛
家集

右六拍と前七拍と合十三拍の傳俳諧一道也

秘事也、極子傳魚々々

古今集傳授之傳

古今此傳授と云ハ、基俊ハ始る基俊より俊成ハ
傳ハ俊成より定家ハ、是より定家より子孫
代ハ傳ハ為せよ、是より為せより、阿ハ、是より、阿
妻常由ハ子孫ハ傳ハ、是より、英法、是より、去ハ、城、主
東下野守常縁ハ、傳ハ、公家ハ、傳ハ、是より、後ハ、小
三條西実隆ハ、秀哥ハ、乃人、故、是ハ、是より、是より、
叡慮、是ハ、是ハ、戦國の事、是ハ、是ハ、縁ハ、是より、
是より、

〇

宗祇法師と云風雅人を御内とれ侍候あり
英濃へ書いさし一勅を仰ぐ常縁安く
実隆へお侍り其侍使たり故宗祇自然と
一代の入り實際を及右大臣に任したまひ
道遥院殿と号し古今源氏の侍を子息に光
院殿の侍より進み光院実隆より其子公澄へ
傳へり其公家の子秀家此人を武家
の進とも長岡兵部太補後孝へ傳へられり
志うけよ石田治部少補三成を為し新堀へ

いま勝敗変せしれとも勅使として為丸光廣は
加茂社人松下といふ者をより進み勅なりとて
支陣を引く支陣中におかろく後孝より光廣へ傳
光廣是を受く天子へお侍仕なる後孝は
帝に師範なり後孝は是を攻め朝敵とて光廣
の進み頼りより石田止子を母を支陣にお
りて治りより光廣を大納言に任しあれより
天子の御お侍とあり今より進み近衛代に禁中
より時此秀哥の人の御お侍もなり也是はあ人の

不叶一人を造とも方一れりの為縁少といふを一人
副ら源近、中院通茂、同通躬武者、小路実信、烏丸
光榮、三條西公福、ちと其傳授の人之名れ出とく重き
りよて此大外傳よき理わつて好し

源氏物語之傳

源氏物語より此大外といふ揚名外傳よ止るあま
古来より此書外一の秘りといふ揚名外と云事多敷

の意小出より却て揚名外此官といふ秘は越後の
國に改を執りお中一の人を越後守に改を越後女と
と其國改勢もあつて越後を城後女とく
官名計を下さるを揚名外とも云之其友の事平
ふれしを名えり揚名外と云心なり其故源氏物語
の秘史も家筋由一岡白丸輔せり此の意とも勢
あり天下に改勢、外れ人よとて造りしをさして
揚名の岡白とも云へしとわきより然れ其意の
事よ終る人の事も何し以智名を其実と云心あるふ

源氏物語のうらまは空際と云女は夫ハ伊豫女に任
て伊豫の國へ下り伊豫に因改を執りし事ありまを
揚名の女と有り有名に実もあきまのを揚名
女と云らりつひ云揚名女とお違ひし事あり
秘傳と云し事之伊豫一し事して名こり此伊豫
の女は揚名の女と云傳校の文おなり世上に學者
さへくよ説をあるとも事し其正傳ハ至極乃
秘傳也一書年ありハさし

徒然草之傳

徒然草の内此大事とて秘するハ就中布の
本紙白うる星之布の本紙ハ天子御座の前ハ
簾あり其簾外ハ去額モカウと云て信年しハ
水引と云物を錦を拵し引たり種あり
諫箇れ時ハ之をあらめて阿之と加ふも落墨
染の布をあらして引たり是喪にあら
せある飾をあらむ玉拵なり今以て乃
故之種あり徒然の徒抄も簾に縁を結して
あらく夫ハ本紙の紋を常々引らる諫箇

○
の時ハ布をてあつらへて書きて本紙を書き
付らば紙の布紙あつらへて書きといふ義を
了と云ふ是ハ禁中此故実を知らざる人の愚よ
ふら説き取ふといふ義に勿論徒然草
もも諺圖に事あるいまくけき阿の書
簾をわけ布れもわあつらへて書きといふ
真額ハ信ふ云水引なり紋の義もあつら
白く塗りといふハ蘇琳に云く蘇琳の花は白
なり色ありて奥ハ白く俊恵法師に寄ふ

志路うらりよ嘆息ハ何と蘇琳の

夕色の志路をまぬえりて

是鏡もや夕部れ志路を結さるとハ今れあき
事よたとくよとくよとくよ其人の顔色れ
今あおまきを見てもうあき例も引て
志路うらりれやとくよといひてその也
それハいふ事のとくよけらけら氣の
毒さよとくよあつらへて此をの顔も似て
とくよとくよ傳授なり

伊勢物語之傳

伊勢物語なりけ内よ秘事とて傳ふ志不
し里なり是は富士の山此形を記さるる志を
し里れやうふあんをけると云志なりし志を
アといふなりし此字ハ助字之竹とを
をりしけり此傳の中言ふ左右一詞一詞の
見ゆるを表しといふなり是秘傳あり
右の傳努力振りも傳ふるも此秘事此秘也
と聞書おらんぬ

